

京都大人文科学研究所（京都市左京区）で昨春、発見された同研最古とみられる戦前の中国調査隊の映像が28日から、京都大総合博物館（同）で開催中の「学術映像博2009」で公開される。前身の東方文化学院京都研究所時代、1934年の北京視察旅行や38年の仏教遺跡・雲岡石窟発掘調査の様子が撮影されており、当時の調査やその過程を知る上で貴重な資料として注目されている。

フィルムが「発見」されたのは昨年3月。同研付属東アジア人文情報学研究センターの収蔵庫を整理した際、缶に入った4本のフィルムが見つかった。酸化が進んでいたが、業者に修復を依頼。復元された映像は同セ

人文研最古 戦前の中国調査映像

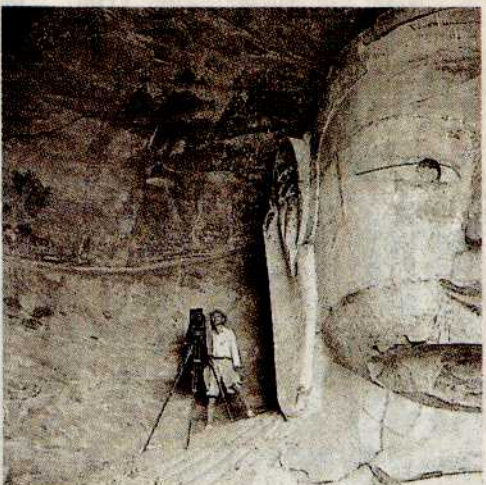
京大総合博物館、きょうから上映

ンターの安岡孝一准教授らが分析したが、「編集されていて、撮影目的は報告用なのか、よく分からない」という。

中国文化を中心とする研究機関・東方文化学院京都研究所が外務省の助成で設立されたのが29年で、そのすぐ後の映像。調査写真は豊富にあるが、動画は珍しいという。関東軍の軍人の姿もあり、戦争の影も感じられる。

1本15分の映像で、調査隊の研究者が撮影したらしい。「北支遊記」という映像は、食事をしたり、町を歩く北京の人々の風俗を記録。36年の響堂山調査の映像は、人文研の財産となっている石碑拓本の作業も収録していた。考古学者水野清一氏（のちに同研教授）が指揮し、本格的な調査で高く評価された雲岡石窟調査の映像は、フィルム2本にわたっている。主に水野氏自ら撮影し、今は公開されていない巨大石仏や、一行が現地へ向かう移動の様子も分かった。

安岡准教授は「研究面での新たな発見はないが、当時の中国の町や寺の雰囲気、調査にどんな機材が持ち込まれたかなどが分かって貴重」と話す。上映は11月1日まで。10月31日午後2時から解説トークを行う。有料。



京都大人文科学研究所内で発見された「雲岡石窟発掘調査」の映像（1933年）